



伝統とモダニズム

——大江宏の言葉から

- 建築と社会性
- モダニズムの精神
- 伝統と原体験
- 建築家の職業意識
- 装飾と気配
- モダニズムと日本の空間

PROFILE

富永 譲 (とみなが・ゆずる)

1943年台湾台北市生まれ、奈良県で育つ。1967年東京大学卒業、72年まで菊竹清訓建築設計事務所に勤務。その後、建築家としての活動とともに、ル・コルビュジエを中心としてモダニズムの建築を研究。2002年から14年まで法政大学教授（現・名誉教授）。ひらたタウンセンター（2002）で日本建築学会賞作品賞を受賞。

インタビュー＆構成＝長島明夫 ※編集協力＝石井翔太（法政大学大学院）

建築と社会性

——大江さんとは生前、お付き合いはあったのでしょうか。
富永 パーティの席で時々お会いしただけで、あまり近い建築家だとは思っていませんでした。鈴木博之さん（1945-2014）とか石山修武さん（1944）とか、高山建築学校関係の大江シンパがいたんですけれどね^{【*1】}、その人たちの動きとは距離があった。ただ、大江さんの建築論というか、言っていることは、今回あらためて読んでもまったく同感するところが多い。今こういうことを建築界ではつきり言う人がいないですよ。だからもう一回きちんと受け取る必要はあると思います。

——今回の抜粋集は、特集のテーマを前提にしつつ、それなりに客観的に選んだつもりですが、今日はこれをなぞって、大江さんの思想的なところから建築の具体的なかたちに移っていただければいいかなと思っています。

富永 はい。ただ、A「建築家の倫理」の最初の頃から五〇年経っているわけですよ。そうするとかなり日本の社会も変わってきている。例えばこのA2の民衆論。今の建築家が置かれている状況はフェーズが違って、要するに住民参加というような問題があるわけです。建築家自ら声高に「住民参加でこうなつたんです」ということを、自分の社会的な正当性を主張するやり方として言いだした。大江さんは、建築家の主体というものが突出して民衆から離れて

いるという批判をしているけれども、今は民衆にどれだけ擦り寄って自分はやったのかを誇らしげに言う建築家が沢山出てきたんですよ。東北の問題でもそういう人はいるだろうし。いかにもみんな決めてましたということが、いわゆるビュロクラシー^{【*2】}の基となつている民主主義の、市民の税金で建てるといふことの逃げ道に使われている。地方自治体なんかもそういうことを望んでいるわけです。何か起きた時に「あなた自身が自分でやったんでしょ」と言うための道具に使われているんですね。建築家が市民の調停者になつて、結局建築を政策遂行の道具に貶めている。それで建築の人間の部分はことごとく砕け散る。要するに今は広告的な社会だから、俺はこういうふうにやつてるんだと見せたがるけど、結局自分がいない、主体がないわけです。自分がどうあるかより、自分がどう見えていくかが目的になる。

——他人の存在はすごく意識するけれど、それはあくまで他人の目というものであって、自分がこうすれば他人にはこう見えるという、自分の想像の範囲に付属した他人ですね。大江さんが世阿弥（1363?-1413?）の「離見の見」という言葉を引く時^{【*3】}の、「自」と他者の切迫した関係のような認識はない。

社会性は今、建築界の一つのキーワードになっていると思

【*2】官僚制。以下 wikipedia より。「多くの政党・政治団体の他、私企業、労働組合、社会福祉団体、非政府組織（NGO）などの民間団体にも見られるヒエラルキー（位階、階層）構造を持ったシステムである。基本的な特徴としては、以下の点が挙げられる。／形式的で恒常的な規則に基づいて運営される。／上意下達の指揮命令系統を持つ。／一定の資格を持った者を採用し、組織への貢献度に応じて地位、報償が与えられる。／職務が専門的に分化され、各部門が協力して組織を運営していく分業の形態をとる。

【*1】参考＝石山修武・鈴木博之「得たもの、残るもの——追悼大江宏先生」『建築文化』1989年6月号など。高山建築学校は法政大学講師だった倉田康男（1927-2000）が1972年に設立した私塾。毎年夏期に合宿形式で開講し、大江や石山、鈴木他、小野二郎（1929-82）、木田元（1928-2014）らが講師として参加した。